様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０２７２６

研究課題名（和文）多言語・多文化社会の言説におけるポライトネスの日独対照社会言語学的考察

研究課題名（英文）A Japanese-German contrastive sociolinguistic study of politeness in the discourse of multilingual and multicultural societies

研究代表者
山下　仁（Yamashita, Hitoshi）

大阪大学・大学院人文学研究科（言語文化学専攻）・教授

研究者番号：７０２４３１２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：多言語・多文化共生に関する言説にみられるポライトネスおよびインポライトネスの問題を、日独対照社会言語学の観点から分析し、そこでのストラテジーを明らかにすることが本研究の目的であった。2019年に始まったコロナ禍は、ドイツにおいても日本においても社会の分断を招き、まさに、人間関係が阻害された状況となった。そんな中、本研究では、ドイツ語を専門とする研究者との情報交換を通して、ドイツと日本における政治家の談話、国会での議論を、ポライトかインポライトかという問題ばかりではなく、協調的か協調的ではないか、という観点から分析し、フーコーの概念を引き継いだイェーガーの装置概念の可能性について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまでの社会言語学や語用論研究は、コミュニケーションが成立していることを前提にしていたため、非協調的な談話はあまり扱ってこなかった。本研究では、グライスの協調の原理の問題点を批判的社会言語学の観点から明らかにしつつ、ドイツにおける批判的談話研究の第一人者であるイェーガーの装置分析を用いてメルケルの演説などを考察した。批判的談話研究は比較的新しい学問分野で世界中で多くの研究がなされているが、装置分析に関してはまだ多くの研究があるとは言えない。本研究は非協調的な談話をインポライトネスの観点から装置分析を用いて考察したものであり、画期的でありユニークな試みとしての学術的、社会的意義が認められる。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study was to analyse the issues of politeness and impoliteness in discourses on multilingual and multicultural conviviality from the perspective of Japanese-German contrastive sociolinguistics and to identify strategies in this context. The Corona disaster that began in 2019 has led to social fragmentation in Germany and in Japan, and it was, indeed, a situation in which human relations were inhibited. Against this backdrop, this study, through information exchange with researchers specialising in German, analyses political discourse and parliamentary debates in Germany and Japan, not only from the perspective of whether they are polite or impolite, but also from the perspective of whether they are cooperative or uncooperative, and examines the possibility of Jaeger's concept of dispositiv, which took over from Foucault's.

研究分野：ドイツにおける社会言語学

キーワード：批判的談話研究　ポライトネス　インポライトネス　協調的なコミュニケーション　非協調的なコミュニケーション　批判的社会言語学　フーコーの装置概念　イェーガーの装置分析

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
研究開始当初は、コロナ禍の状況にはなかった。当時は国際学会にも問題なくいくことができたが、2019 年の 12 月から新型コロナ感染防止のため海外へ行くことができなくなり、世界的にも学会は中止になった。このことが、今回の研究にとって大きな障害になった。他方、コロナ禍により、それまでの社会の分断などが加速し、本研究のテーマには関係の深い状況が生じたということもできる。また、本研究の背景にある批判的社会言語学という考え方は日本ばかりではなく、ドイツ語圏においても進展し、特に批判的談話研究という新たな分野は着目されるようになった。そんな背景のなか、29 年度は、予定通り Paul Grice の協調の原理を批判的にとらえ、イェーガーの装置分析の可能性を考えるなど、海外の研究者との共同研究のための準備をすることができた。

２．研究の目的
多言語・多文化共生に関するさまざまな言説にみられるポライトネスおよびインポライトネスの問題を、日独対照社会言語学の観点から分析し、そこで用いられているストラテジーを明らかにすることが本研究の目的である。近年のドイツにおけるポライトネス研究においては、よりよい人間関係を構築するためのポライトネスばかりではなく、人間関係を阻害するようなインポライトネスの現象にも目を向けるようになってきている。本研究では、ドイツ語を専門とする研究者との情報交換を通して、ドイツと日本における一般の人々や政治家の談話、新聞報道を対象として、いかなる現象がポライトもしくはインポライトと解釈できるかを対照社会言語学の立場から分析し、そのストラテジーを解明して、そこに顕れる人々の意識の変遷について考察する。

３．研究の方法
まず、理論的研究を実施する予定にしていた。このテーマについて対照社会言語学的な研究を行う上での前提として、Paul Grice の協調の原理の問題を考察した。協調の原理は、量の公理、質の公理、関連性の公理、様式の公理という４つの会話の公理に分けられる語用論の基礎であるが、ヘイトスピーチなどの罵詈雑言や嘘はこの中の質の公理に反することになり、この枠組みでは捉えられない。そこで、この理論をグライスの記述を批判的にとらえることで、グライス自身、協調的とはいえないコミュニケーションの問題を認識していながら、この問題については考察しなかったことなどを明らかにした。その後、ベルリン自由大学の野呂香代子らと意見交換を行い、野呂が批判的にとらえた当時のメルケル首相の演説についての議論を踏まえ、それを装置分析という形で検証してみた。その間、デュースブルク大学のウルリヒ・アモン教授も、ジークフリート・イェーガー教授も亡くなり、議論することができなくなったが、デュースブルク語学研究所を引き継いだマーガレット・イェーガーとは連絡をとり、装置分析に関するジークフリート・イェーガーの著作について議論する機会を得た。装置分析という方法はまだ十分に理解することができていないため、今後も名嶋義直や野呂香代子などとともに研究会を重ねることで、より精密な分析を試みたいと思っている。

４．研究成果
この期間には、以下のような講演および研究発表を行った。

① 2017 年 12 月 16 日「現代社会における断絶のコミュニケーション」問題提起，阪神ドイツ文学会第 224 回研究発表会　シンポジウム　大阪市立大学
② 2018 年 11 月 19 日"Lexikologie im postfaktischen Zeitalter-am Beispiel der japanischen Sprachgeschichte", Hitoshi Yamashita, ウルビーノ大学ドイツ語学科招待講演（研究仲間である Claus Ehrhardt 教授に招待された）
③ 2019 年 04 月 02 日 Die Invektive verschleiernde Funktion der Sprache, Hitoshi Yamashita, "Invectivity. A New Paradigm in Cultural Studies" 早稲田大学
④ 2019 年 09 月 17 日　社会言語学から見た敬語の考察　西安外国語大学日本語学科講演会（中国のポライトネス研究の第一人者である毋育新教授に招待された）
⑤ 2020 年 1 月 31 日"Die verschleiernde Funktion der Sprache"ソウル大学ドイツ語研究会(ソウル大学の Sang Hwan Seong 教授に招待された)
⑥ 2020 年 2 月 2 日"Probleme der kontrastiven Soziolinguistik Deutsch und Japanisch vom Gesichtspunkt der Höflichkeitsforschung"韓国ドイツ言語学会(ソウル大学の Sang Hwan Seong 教授に招待された)
⑦ 2021 年 7 月 29 日 Ablehnung der Kommunikation: Pragmatische Überlegung über die kontrastive Untersuchung der nicht-kooperativen Kommunikation, IVG(国際ゲルマニスト会議・オンライン参加)
⑧ 2022 年 4 月 3 日「ジークフリート・イェーガーの装置分析について」阪神ドイツ文学会第 237 回研究発表会、関西学院大学

また、以下の著作を出版した。

① （分担執筆）Sprachlieche Höflichkeit Historische, aktuelle und künftige Perspektiven, „Höflichkeit und ihre Kehrseite“ pp. 121-133、2017 Narr Attempto Verlag

② （分担執筆）Raumerfassung- Deutsch im Kontrast, „Soziale Distanz im deutschen und japanischen Verkaufsgespräch“ pp.123-138、2017 Stauffenburg Verlag

③ （分担執筆）『人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育』、第 5 章「社会言語学からみたこれからの言語・コミュニケーション教育の課題」pp.94-119、2018.11 三元社

④ (共著)『断絶のコミュニケーション』 、第 10 章「ヘイトスピーチに関する社会言語学的考察」 pp.215-235、2019.3 ひつじ書房

⑤ （分担執筆） Form, Struktur und Bedeutung-Festschrift für Akio Ogawa, „Die Invektiven verschleiernde Funktion der Sprache“ pp.387-406、2020 Stauffenburg

⑥ (共著)『対抗する言語―日常生活に潜む言語の危うさを暴く』、第 11 章「怒りの隠蔽―聞き手に怒りをもたらす言語機能について」 pp. 339-369、2021.1 三元社

論文は、以下のとおりである。

① 「「協調の原理」再考―批判的社会言語学の観点からの一考察―」 『言語文化共同研究プロジェクト 2017：批判的社会言語学のメッセージ』 pp.3-15 2018 大阪大学大学院言語文化研究科

② Lexikologie im postfaktischen Zeitalter：amBeispiel derdeutschen und japanischen Wortschätze ”『言語文化共同研究プロジェクト 2018:批判的社会言語学の思潮』pp.25-3 2019 大阪大学大学院言語文化研究科

③ 「批判的社会言語学の課題―新型コロナウイルスとの共生―」『言語文化共同研究プロジェクト 2019」：批判的社会言語学の探訪』 pp.3-15 2020 大阪大学大学院言語文化研究科

④ 「社会言語学と国レベルの言語政策の関係－新型コロナウイルスの影響－」『言語文化共同研究プロジェクト 2020』：批判的社会言語学の探訪』 pp.15-27 2021 大阪大学大学院言語文化研究科

また、大塚生子、柳田亮吾とは本研究と密接に関係する「イン／ポライトネス研究の新たな地平」（仮題）という著作物を出版する予定であり、現時点ではすでに初校がでており、2023 年 6 月もしくは 7 月に出版されることになっている。そこでは、次のように記している。「本論文集は、従来のポライトネス研究ではあまり扱われてこなかった現象を考察の対象とすることで、これからのポライトネス研究の射程の広がりを示そうとしたものである。その広がりとは、すでに述べたようにミクロレベルからマクロレベルのコミュニケーション、フェイスに限定するのではなく感情などの役割についても考え、理論としてのポライトネスではなく、現実の生活世界に存在する市井の人々の視点を出発点とする研究ということができる。しかし、もっとも顕著なのはポライトネスだけではなくインポライトネスについても考察するということであり、現実の社会には協調的とはいえないコミュニケーションも存在するという認識を研究の前提とする、ということである。」このように、本研究によって、これまでポライトネス研究の枠組みを越えた問題について議論するきっかけが得られたと思われる。その成果をまとめると、以下のように記すことができる。以下は、これは、言語文化共同研究プロジェクトに掲載した論文の一部であるが、本研究の成果としても理解することができると思われる。「筆者は 2021 年 7 月にイタリアのパレルモにおいて開催された国際ゲルマニスト会議において ”Ablehnung der Kommunikation: Pragmatische Überlegung über die kontrastive Untersuchung der nicht-kooperativen Kommunikation ”というタイトルの発表をおこなった 。その後、これに対して、研究仲間の Claus Ehrhardt から「協調の原理を提唱したグライスの理論的伝統にしたがえば、コミュニケーションと協調はほぼ同じレベルにあり、コミュニケーションをするということは協調することになるため、協調的といえないコミュニケーションというものはない」という批判を受けた。たしかに、Ehrhardt のいうように、理論的に考えると、コミュニケーションとは協調することであるということもでき、それにはそれなりの言い分があると思われる。しかし、理論はあくまで理論であり、現実の問題をとらえきれない部分もある。たしかに、理論的には人は言語をもちいて協調的にコミュニケーションをすることができるはずであり、これまでの社会言語学の研究の多くもこの前提にたってなされてきた。ところが、現実の社会にはさまざまな要因によって、協調的とはいえないコミュニケーションが存在する。つまり、現実の社会的問題を出立点にすれば、協調的とはいえないコミュニケーションを確認するのはそれほど難しいことではない。2023 年現在、コロナ禍によって、コロナに対する認識の違いから市民の間に分断が生じ、協調的とはいえないコミュニケーションがより鮮明に顕在化したことは記憶に新しく、2022 年の 2 月 24 日に始まったロシアのウクライナ侵攻なども、協調的ではないコミュニケーションの典型例といえる。もちろん、戦争も協調的なコミュニケーションであるという立場もあるのだろうが、ここではそのような立場はとらない。

この「協調的とはいえないコミュニケーション」を研究するためには、フーコーの装置という概念をもちいたジークフリート・イェーガーの批判的談話研究が有効であると思われる。これを用いて、国会における答弁、首相の演説などを分析してみた。しかし、この装置分析はまだ十分に

整備されているとは言えない。今後は、この分析方法を何らかの形で確たるものにしてみたいと考えている。」

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 パトリック・ハインリヒ、山下仁	４．巻 23
２．論文標題 パンデミックの社会言語学	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ことばと社会	６．最初と最後の頁 10-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

１．著者名 山下仁	４．巻 1
２．論文標題 社会言語学と国レベルの言語政策の関係―新型コロナウイルスの影響	５．発行年 2021年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト	６．最初と最後の頁 15-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山下　仁	４．巻 5
２．論文標題 公開授業座談会　「排外主義の高まりをどうとらえるか」の覚書	５．発行年 2017年
３．雑誌名 言語文化共同研究プロジェクト2016：批判的社会言語学のまなざし	６．最初と最後の頁 25、34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 河村倫哉、宮島喬、山下仁、高谷幸、志水宏吉	４．巻 5
２．論文標題 座談会：排外主義をどうとらえるのか	５．発行年 2018年
３．雑誌名 未来共生学	６．最初と最後の頁 14、53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　4件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Hitoshi Yamashita
2．発表標題 Ablehnung der Kommunikation: Pragmatische Ueberlegung ueber die kontrastive Untersuchung der nicht-kooperativen Kommunikation
3．学会等名 IVG Internationalen Vereinigung fuer Germanistik（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Hitoshi Yamashita
2．発表標題 Die Invektiven verschleiernde Funktion der Sprache
3．学会等名 Invectivity: A New Paradigm in Cultural Studies?（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 Hitoshi Yamashita
2．発表標題 Die verschleiernde Funktion der Sprache
3．学会等名 アジアゲルマニスト会議（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 山下　仁
2．発表標題 社会言語学の観点から見た敬語の考察
3．学会等名 西安外国語大学（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Hitoshi Yamashita
２．発表標題 Die verschleiernde Funktion der Sprache
３．学会等名 ソウル大学（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hitoshi Yamashita
２．発表標題 Probleme der kontrastiven Soziolinguistik Deutsch und Japanischvom Gesichtspunkt der Hoeflichkeitsforschung
３．学会等名 韓国ドイツ言語学会議（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Hitoshi Yamashita
２．発表標題 Die Invective verschleiernde Funktion der Sprach
３．学会等名 Invectivity, a new paradigm in cultural studies
４．発表年 2019年

１．発表者名 山下仁、高田博行、田中愼、川島隆
２．発表標題 現代社会における断絶のコミュニケーション
３．学会等名 阪神ドイツ文学会第224回研究発表会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

1．著者名 柿原武史、仲潔、布尾勝一郎、山下仁	4．発行年 2021年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 390
3．書名 対抗する言語	

1．著者名 高田博行・山下仁（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 272
3．書名 断絶のコミュニケーション	

1．著者名 佐藤慎二・村田晶子（編著）	4．発行年 2018年
2．出版社 三元社	5．総ページ数 272
3．書名 人類学・社会学的視点からみた過去、現在、未来のことばの教育	

1．著者名 Hitoshi Yamashita	4．発行年 2017年
2．出版社 Narr Francke Attempto	5．総ページ数 404
3．書名 Sprachliche Hoeflichkeit: Historische, aktuelle und kuenftige Perspektiven	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関